

風をきって走る

小五

四月の体育はリレーでした。チームの人数合わせのために、わたしは二回走りました。そのうち一回はアンカーでした。わたしはそのとき、「無理だ。二回も走れない。」と思いました。アンカーのメンバーは、クラスでも足の速い子たちでドキドキしましたが、全力で走り、わたしのチームは一位になりました。四月の終わりにもう一度走ったときには、タイムを二秒ちぢめることができ、とてもうれしかったです。短いきよりを全力で走るとはすごくつかれるけれど、気分がよくとてもそうかいでした。そんなとき、父が母

に話していた言葉を思い出しました。

「風をきって走ったの、本当に何年かぶりだよ。」

わたしの父は足が悪いので、走ることができません。若いころに交通事故で足の神経をいためてしまったそうです。自分の体を支えて立つことや歩くことはできますが、四才の妹のかけっこにもついていけません。階段をのぼるのも思うように足が動かないので、とても時間がかかってしまい、こまることもあるそうです。

わたしが五年生になる春休みに、父は馬に乗る教室に連れて行ってくれました。わたしは、父は足が悪いから準備にとまどい、馬におそるおそる乗るすがたを想像していました。けれども、わたしが見た父は、想像とは全くち

がっていました。オレンジ色の乗馬用のユニフォームがとても格好よかつたし、馬に付けるたづなや、ぼうしを手際よく準備して、馬のあつかいにも慣れていました。走るすがたは、りんとしてさっそうとしていました。馬は、自分をさわる人が自分をどうあつかうか、よく感じていて分かるそうです。人がドキドキしていたり、こわがったりしていたら、馬もソワソワするし、安心してやさしくなったり楽しんだりするし、馬も気持ちよく走るそうです。父は馬と気持ち通じているかのように関わり、馬もとても安心して見えました。まだまだ練習を始めたばかりなのにと、わたしはおどろきました。父は、

「オリンピックに出られるかな。」

と言つて、練習に行つています。わたしは、生まれてから当たり前ハイハイして歩いて走つて、今は十才です。父は、

「馬に乗るのに十年かかったよ。」

と言つていました。交通事故の後、歩くことすらままならなかつた父。馬に乗り、かけぬけることがとてもうれしかったにちがいありません。わたしが当たり前にしてきたことは、誰にでも当たり前前のことではなかつたことに気が付きました。さらに不自由があれば、道具を使つたり、人の手を借りたりしてできることがあることにも気が付きました。目が悪ければつえを使うことなどです。それは、だれもが必要になることかもしれませぬ。父のように、やりたいことにちよう戦したい人たち

のために、できるだけたくさんの道具があるといいと思います。例えば、わたしがあるといいなと思うのは、足が不自由な人のためのくつです。このくつは、足が不自由な人の足元を支えてくれる機能があり、それをはけば一般の人と同じように歩くことができます。のです。見た目も他のくつと同じにして、しょう害のある人もはきやすいように工夫されているといいなと思います。もしこのくつができたなら、一番に父にプレゼントしたいです。

また、周囲の人のほ助も大切です。わたしは、助けが必要なときは、いつでも

「力を貸してください。」
と言ったり、助けを求められたときには、手やかたを貸せたりする人になり

たいです。わたしの家族は、父が長時間歩くときは車いすのほ助をしています。立って長く待たなくてはいけなときは、手をかたに置いてもらい、つかれないように支えます。ちよつとした手伝いをするので父は、わたしたちと同じように生活することができません。周りの人がほんの少ししょう害のある人を手助けすれば、その人は気持ちよく過ごすことができるのです。

父は、しょう害があつて走ることができなくても、いつも進んで体を動かそうとしています。そして、毎日仕事もがんばっています。そんな父がわたしは大好きです。父は、

「どんなことがあつても、家族を守る。」
と言つてくれました。わたしたち家族

は、父が過ぎしやすいように支えてい
ますが、本当は、父がわたしたちを一
番支えてくれているのだと思います。
わたしはこう思います。しょう害のあ
ることは弱いことではなく、強くなる
ことなのだ。